埼大附属特支・研究企画係

研究概要

令和8年11月5日（木）



これから求められる教師像

・一人一人の多様な状況や特性を踏まえ、個に応じた学びを支えること
・多様な子どもたちを誰一人取り残さず、全ての子どもの可能性を引き出すこと
・変化する社会に対応するため、教職生涯を通じて自律的・継続的に学び続けること
・単なる知識の伝達者にとどまらず、主体的な学びを支援する存在へと役割を転換すること

☞ **一つの基準で教え込むのではなく、多様な価値観を探り続けること**

「令和の日本型学校教育」の構築を目指して
～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～（答申）
中央教育審議会（2021）

新たな教師の学びの姿

・養成段階を含めた教職生活を通じた学びにおいて、「理論と実践の往還」を実現させる

▶自らの実践を理論に基づき 省察 することが必要になってくる

・省察的実践を通じて学び続ける教師の育成に今後一層力を入れて
取り組んでいくことが重要

☛ キーワード「省察」

「令和の日本型学校教育」を担う教師の養成・採用・研修等の在り方について～
「新たな教師の学びの姿」の実現と、多様な専門性を有する質の高い教職員集団の形成～（答申）
中央教育審議会（2022）

「省察」の理論

ドナルド・ショーン

技術的熟達者

・知識や技術を身に付け、正しく用いる
・対象と自身を切り離して考える
・既にある正解に近づくことを目指す

省察的実践者

・実践の中で、自らの知識や行為を問い直す
・対象と自身の関係性の中で考える
・状況に応じてより良い実践を作ることを目指す

☛ 「正しい」方法を身につけ適用するだけでなく、
自らの実践を問い直し続ける必要がある

今年度からの研究テーマ

子どもに寄り添う実践をめざして　―　「　　」を問い直す　―

寄り添う実践とは、子どもたちの思いや状況（実態・場所・教師の姿、家庭の様子…）などを理解しようとし続けながら、一人一人の生き生きとした社会生活につながる指導や支援を考え、実践することである。また、そのために必要であれば既存の考え方や仕組みも問い直し続けることを含んでいる。

今年度の研究テーマ

子どもに寄り添う実践をめざして　―　「子どもへのまなざし」を問い直す　―

☛ 寄り添う実践とは、子どもたちの思いや状況（実態・場所・教師の姿、家庭の様子…）などを理解しようとし続けながら、一人一人の生き生きとした社会生活につながる指導や支援を考え、実践することである。また、そのために必要であれば既存の考え方や仕組みも問い直し続けることを含んでいる。

☛ まなざしとは、教師の価値観によって生じる、子どもに対する意味づけ・理解・期待などのことである。まなざしは、教師の表情や言葉、態度、実践構想（単元の組み立て方や授業の展開、指導・支援の方法…）などを通して現れ、それらには子どもとの関係や教室文化そのものを形づくっていく等の働きがある。

まなざしを問い直す

活動を始めようとすると教室の外で座り込む子

A

できることを増やすことが重要である

今の頑張りが将来につながる

- できるだけ教室にいれるように
- 手順表で内容を示す …

B

意欲をもって取り組むことが重要である

何か意思を伝えようとしてくれている

- 無理に教室へ戻す必要はない
- 選択肢を提示する …

☛ 単に支援方法等を検討するだけでは、子どもに寄り添った最適解にならないこともある

子ども達へ向けている「まなざし」を自覚し、問い直すことが、寄り添った実践へ繋がる

研究目的

3年次

子どもたち一人一人の思いや状況などを理解しようとし続けながら、一人一人の生き生きとした社会生活につながる指導や支援を探究することを通して、自らのまなざしや実践を問い直し続け、一人ひとりに合った指導支援を行えるようにする

1年次

自らの子どもへのまなざしを言語化し、その特徴や変容の有無を自覚する

玉ねぎモデル（コルトハーヘン）

人として行動する際に影響を及ぼす様々な側面に焦点を当てるためのモデル

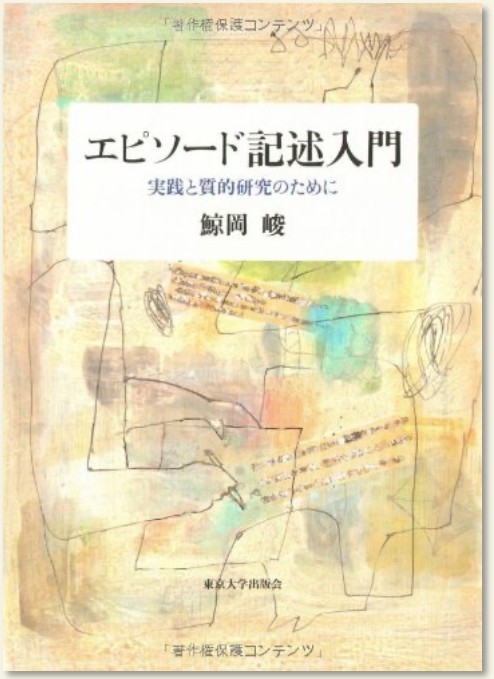
- これらの層は、「まなざし」を構成する要素である
- 自覚することがより深い省察につながる → **いかにして「まなざし」を自覚するか…**



環境	遭遇しているのはどのような状況か？
行動	何をするのか？
コンピテンシー（能力）	何ができるか？
信念	その場面において何を信じているのか？
アイデンティティ	あなたの専門職としての役割はどのようなものだと思うか？
使命・目標	あなたの最も根底にある価値観（理想）とはどのようなものか？
コアクオリティ	個人をその人たらしめる資質

エピソード記述（鯨岡峻）

・鯨岡のエピソード記述を参考にした
　「まなざしの記録」を実践している
・記入者の主観（感じたこと、思ったこと）を重要視する
　記述の方法
・自らの感情が動いた場面を記述する
　（ショーンらの省察のタイミングと同様である）
・エピソードの考察を通して、子どもとの関係や
　それを作る自分自身の「まなざし」を捉え直す



参考文献：
「エピソード記述入門」
鯨岡峻、2005、東京大学出版会

まなざしの記録（記入例）

事実を中心とした記録	まなざしの記録
私はAに材料を渡し、「これを使って作ろう」と声をかけた。Aは材料に手を伸ばさず、私の顔を見ていた。 私が声をかけずに待つと、Aは材料を手に取り、制作を始めた。	私はAに材料を渡し、「これを使って作ろう」と活動を促した。しかし、Aは材料に手を伸ばさず、興味のない様子で、ただ私の顔を見ていた。 私は、Aに活動を始めてほしいと思いながら、どう関わればよいのか戸惑っていた。 私が声をかけずに待つと、Aは材料を手に取った。その姿を見て、私はほっとした。

まなざしの記録（記入例）

どういった想いでその場にいたか

▼

その行動を選択した/その想いになった
のはなぜ？

▼

この場面であなたが大切にしていることは？

▼

まなざしの記録

私はAに材料を渡し、「これを使って作ろう」と活動を促した。しかし、Aは材料に手を伸ばさず、興味のない様子で、ただ私の顔を見ていた。

私は、Aに活動を始めてほしいと思いながら、どう関わればよいのか戸惑っていた。

私が声をかけずに待つと、Aは材料を手に取った。その姿を見て、私はほっとした。

これらを検討することが「まなざし」に気づく一助となる ▶ 他教員との共有も重要

共有方法

各学部にあわせた共有方法

・使用するシートの検討

・協議の展開の工夫



協議で得られるもの

・明確な答えや成果△

・「まなざし」に気づくためのプロセス

・今後の自分自身や
子ども達との向き合い方



期待できること

・教師個人の変容

まなざしに気づくことで子どもの見方、言動の捉え方が変わるのではないか

それによって子どもとの関わり方がどのように変わるのか考えられるのではないか

子どもの見えていなかった姿に気づくことができるのではないか

・教師集団の変容

正解ではなく違いを前提として対話ができるようになるのではないか

・次年度以降に向けて

個人のまなざしに限らず、学校・学部としての実践の省察につながりうるのではないか